教頭会報

栃木県公立小中学校教頭会
発行者　樽　井　　久
編　集　広　報　部

もくじ

◎会長あいさつ …… 1
◎県教頭会・全国・関ブロの動き
　定期総会・講演会 …… 2
　全公教総会・関ブロ提言者研修会 …… 3
◎全国研究大会（静岡大会） …… 4・5
◎特色ある学校 …… 6
◎地区だより …… 7
◎ひろば・編集後記 …… 8

会長あいさつ

教育改革の中で

宇都宮市立城山中学校　樽　井　　久

平成27年度がスタートし、数か月が経ちました。会員の皆様におかれましては、それぞれの学校で子どもたちの健やかな成長をめざして学校運営に尽力されていることと存じます。我が栃木県公立小中学校教頭会は、会員550名が互いに連携・協働し、今年度も研究、調査、要請、広報、ＩＴのそれぞれの活動が順調に展開しております。各専門部の皆様をはじめ、各支部の皆様、さらに会員の皆様のご理解、ご協力に感謝申し上げます。

さて、本会の定期総会での講演会では、文部科学省初等中等教育局視学官田村　学氏による「新学習指導要領の展望～アクティブ・ラーニングの実現に向けて～」についての講演がありました。将来の日本は、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会の状況は急激に変化していくと考えられます。アメリカのある学者によると、近い将来「子どもたちの65％は大学卒業後現在存在しない職業に就いている」「今後10～20年後程度で約47％の仕事が自動化される可能性が高い」と言っています。このような将来を踏まえつつ、地球規模的な視点からの新しい時代に必要となる資質・能力の育成が目前にせまっています。ＯＥＣＤのキー・コンピテンシー（能力・資格・適性の意）では、「①社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力　②多様な社会グループにおける人間関係形成能力　③自律的に行動する能力」の３つのカテゴリーが挙げられています。このキー・コンピテンシーの中心にあるのは、個人が深く考え、行動することの必要性であります。深く考えることには、目前の状況に対して特定の定式や方法を反復継続的にあてはめることができる力だけではなく、変化に対応する力、経験から学ぶ力、批判的な立場で考え行動する力が含まれています。まさに、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた学習法、「アクティブ・ラーニング」の必要性には迫るものがあると考えられます。これからの日本を背負っていく子どもたちが、様々な社会変化の中で柔軟に対応し、堂々と生き社会に貢献できる日本人となるよう、我々教頭は校長を補佐し、学校教育の管理や教職員の育成を大切にしながら、義務教育に課せられた大きな責任と役割を担っていかなければならないと考えます。

本教頭会の今年度活動方針にもある、「教育理念に基づく学校教育の実現」「教頭としての力量の向上」「学校の社会的役割の推進」のもと、本会の各種研修や情報交換の場を通して、我々教頭自身の学びを大切にしながら、様々な教育課題解決のための諸活動を推進してまいりたいと思います。何とぞ皆様のご理解とご協力を賜りますようよろしくお願いいたします。

――県教頭会の動き――

定期総会

舞台係から見た第53回県教頭会総会

舞台係　真岡市立山前小学校　北　井　　清

「第53回栃木県公立小中学校教頭会定期総会並びに研修会」が、５月25日㈪に宇都宮市文化会館小ホールで行われた。我々舞台係５名は11時に打合せを行い、舞台配置、国歌ＣＤ、プロジェクター等を確認。準備はすでに事務局で実施されている。

定刻に開会。国歌斉唱、音量よし。役員報告、樽井会長あいさつ、来賓を代表して、金井正県教育次長あいさつと続き、来賓が退場。議事の前に舞台にひな壇をセット。議長団の見事な進行で議事が原案通り終了。ひな壇を戻す。タイミングが意外と難しいが５名で息を合わせて作業。退会役員感謝状贈呈のためマイクを客席側に向ける。小森一則前会長の晴れ晴れとした笑顔が印象的だった。

講演会終了後、国旗、全公教旗、プロジェクター等片付け。係そして役員の皆様にも感謝。緻密な計画を作成してくれた事務局のおかげです。

講　演　会

新学習指導要領の展望　－アクティブ・ラーニングの実現に向けて－

文部科学省初等中等教育局　視学官　田　村　　学 氏

塩谷町立船生小学校　齊　藤　和　久

時宜を得たテーマで、具体的な事例も多く聴講者に分かりやすい講演でしたという感想が寄せられた。次期学習指導要領の改訂に向けて、アクティブ・ラーニングなどをよく理解し、各学校で教育活動に活かしていただきたいと思う。次に、講演内容の一部を紹介する。

アクティブ・ラーニングという言葉を日本語に直すと「能動的学習」となるが、諮問文「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」では、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」としており、このような授業を積極的に入れていこうということである。例えば、社会科の問題解決的な学習や理科の発見学習、生活科の体験学習や総合的な学習の時間の探究的な学習、言語活動は、アクティブ・ラーニングに入る。したがって、アクティブ・ラーニングは、これまでやってきたことと違う新しいことが始まるとか、過去を否定するようなことでは全くなく、今までやってきたことをむしろ充実させ広げていくことである。

今までの学習指導要領は、何を学ぶか（コンテンツ）が示されていたが、次の改訂では、どのように学ぶか（キーコンピテンシー）が最大のポイントになる。例えば、課題発見力、論理思考力、コミュニケーション能力など、各教科で育成する能力や各教科を横断するような実社会で活用する能力、「汎用的能力」を重視していこうというのが次の改訂の方向性である。つまり、資質・能力の育成に向けて「アクティブ・ラーニング」という方法をとっていこうということである。

アクティブ・ラーニングは、別の見方をすると、「プロセスの充実」であり、このプロセスは、友だちや先生、時には地域の人たちと共に学ぶことによって充実してくる。今回の学習指導要領「総合的な学習の時間」の解説で探究のプロセス（課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現）を示し、これを実践している学校では大きな成果が出てきている。このプロセスの中で、例えば、情報収集では、社会科の資料活用能力、国語のインタビューの仕方。整理・分析では、ヒストグラムなどのグラフを使い、まとめ・表現では、作文を書いたり、文章を書いたり話したりして、繰り返し知識や技能を使うことによって、「単独系の知識」が「関連系の知識」となり学力の向上につながる。

――全国・関ブロの動き――

全公教総会

全国公立学校教頭会総会に参加して

全公教総務部副部長　宇都宮市立西が岡小学校　山　岸　一　裕

６月５日に、全国教頭会第57回総会に参加させていただきました。午前中の総会では全公教の目的を達成するため、「研修活動の充実」「要請活動の充実」「組織の発展・強化」「被災地への支援」といった４つの方針に基づき活動することが確認されました。

午後は文部科学省文部科学審議官前川喜平先生を講師にお迎えして、「教育改革の現状と課題」という演題で、講演会が行われました。

学習指導要領改訂については、育成する資質・能力を育む観点から学習評価を充実し、これまでの「何を学ぶか」という知識の質・量の改善に加え、「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視することなどを基本的な考え方として検討されているとの話がありました。特に主体的・協働的に学ぶ学習であるアクティブ・ラーニングは、これまでも小・中学校では行われており、学ぶことと社会とのつながりを意識しながら進めていけばよいとのことでした。

このほか、グローバル社会で「協働」「共生」していけるような教育の１つとして、地球規模の課題を解決する力を身に付ける教育であるＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）や小学校における英語教育、また、小中一貫教育の制度化や教職員指導体制の充実（チーム学校）等、教育改革の現状と課題について詳しい資料を基にお話ししていただきました。

総会や講演会を通して、学校教育を取り巻く環境は急速に変化しており、私達教頭は、今後の学習指導要領改訂を見据え、教育改革の現状を注視し、さらに研修を深め知見を広めるとともに、自校の教職員に対しても分かりやすく説明していく必要があると感じました。

関ブロ提言者研修会

関ブロ教頭会提言者研修会・研究部長会報告

県教頭会研究部長　宇都宮市立雀宮中学校　熊　倉　　仁

梅雨の晴れ間がのぞいた６月25日㈭・26日㈮の２日間にわたって、関ブロ教頭会提言者研修会・研究部長会が山梨県甲府市のホテル談露館において開催された。

第１日目は、開会行事後の全体会において、まず、関ブロ山梨大会研究部長・加賀美公人教頭から関ブロ山梨大会の研究概要についての発表があり、その後、実行委員会研究部長・筒井一枝教頭から、本日の分科会の持ち方に関する説明があった。山梨では全国統一研究主題を基に、サブテーマとして～「たくましい力」と「しなやかな心」を育む学校づくり～を位置づけ、全国公立学校教頭会の基本方針を踏まえた「継続性」「協働性」「関与性」に焦点化した研究を進めているとの報告があった。

１日目後半の分科会では、各課題に分かれて提言者の論文と協議会の柱の検討を行った。本会（関ブロプレ大会）が本番の約５か月前に開催されるため、関東甲信越各都県から参集した提言者の論文の完成度が危惧されたが、いずれの提言者も関ブロ大会の本番を見据えてしっかり論文を完成させており、改めて提言者の意識の高さに感心した。

本県からは、第１分科会Ｂと第５分科会Ａに宇河地区中学校副校長・教頭会（発表者：宇都宮市立陽東中学校　井上副校長）と宇都宮市・上三川町小学校副校長会（発表者：宇都宮市立篠井小学校　大久保副校長）がそれぞれ参加し、論文の説明や検討を他都県の提言者や研究部長と共に行い、大会当日の指導・助言者から発表についての御指導をいただいた。

第２日目、全体会では各分科会での話し合いの概要の発表と意見交換、各都県の研究の取組状況の報告があり、閉会となった。その席上、例年10月～11月開催の関ブロ大会の原稿締切が７月中旬であることについて、延期希望の声が提言者から多数寄せられ、今後の課題とすることが確認された。

研修に参加し、関ブロ大会に果たす提言者研修会・研究部長会の役割の重要性が理解できた。特に、指導助言の質を高めるために、山梨教頭会が独自に設置したアドバイザーである常任助言者の存在の大きさが強く印象に残った。関ブロ大会の研究の質の向上に目を向けた時、常任助言者のように経験豊かなスーパーバイザーに期するものは大きい。本県においても、３年後の関ブロ栃木大会の開催に向けて、研究の質を維持する意味合いからも、指導助言者の確保についての検討を要するのではないかと感じられた次第である。

――全国研究大会（静岡大会）――

開会式・シンポジウム

宇都宮市立戸祭小学校　渡　邉　　宏

７月29日～31日、約2,800名の教頭・副校長が参加し、第57回全国公立学校教頭会静岡大会が開催された。「郷土を愛し　人との関わりを大切にし　夢に羽ばたく子どもの育成」をサブテーマに掲げた今大会は、未来を築く子どもたちの健やかな成長のために、副校長・教頭として「何ができるのか」「何をしなければならないのか」を共に考える場にしたいと実行委員長の挨拶から始まった。

その後、全公教研究部長から十期のテーマ『豊かな人間性と創造性を育む学校教育』について、また「生き抜く力、絆づくり」をキーワードとした経緯等について説明があった。

シンポジウムでは村山　功教授（静岡大学大学院）より、「児童の将来就きたい職業と親が子どもに就かせたい職業とのギャップに対し、どのようにキャリア教育を進めていけばよいか。」「子どもが希望する職業は地元（地方）にはなく、地方から出て行かざるを得ない状況を考えた際、学校現場として地方の活性化や将来性に対して、どのような取組ができるのか。」といった提言が示された。

これに対し、杉田　洋教授（國學院大学）、平山佐知子氏（フリーアナウンサー）、松永勝裕氏（㈱アンビ・ア代表取締役）のシンポジストからそれぞれの立場で主張が論ぜられた。「主体的に生きることへのこだわりを持つこと、自分への自信を持つことが、将来の職業観や働くことへの意識を高めていく上で重要であること。教師は子どもの可能性を認め、励まし続けることで子どもの自己実現が図られること。」等といった助言をいただいた。

会場となった浜松市は「楽器の街」「餃子日本一」「徳川家康ゆかりの地」ということで、何となく街並みの其処彼処に親近感を感じる３日間となった。

記 念 講 演

記念講演を聴いて

宇都宮市立瑞穂野南小学校　水　口　武　雄

７月31日、静岡県浜松市のアクトシティ浜松において、静岡大学名誉教授・文学博士小和田哲男氏を講師に迎え、「歴史に学ぶ補佐役の役割　～徳川家康とその家臣団を通して～」と題した記念講演が開催されました。小和田氏は北條早雲や小田原北条氏研究の第一人者であり、ＮＨＫ「その時歴史が動いた」の解説者としての出演や、大河ドラマでは、「秀吉」「天地人」「江～姫たちの戦国」で監修・時代考証を務められるなど、豊富な経験を生かした素晴らしい講演でした。

小和田氏は、歴史上の人物における補佐について話をされました。「①上杉景勝を支えた重臣筆頭の直江兼続や、豊臣秀吉を支えた右腕としての軍師・参謀である黒田官兵衛など、いわゆるナンバー２である戦国の名参謀が歴史を動かした。②毛利家の文書『君は舟、臣は水、水よく舟を覆す』を引用して、補佐役には大切な役割がある。③徳川四天王である酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、井伊直政など、家康の補佐役は時代によって異なった。④徳川実紀の『己が心を捨て、たゞ人の長所をとれ』や、岩淵夜話の『宝の中の宝といふは、人材にしくはなし』を引用して、家康の人材観は重要である。」など、補佐役は組織の要であり力を発揮することを期待するとしてまとめられました。

徳川家康公顕彰400年の節目である今年、家康公が晩年を過ごした霊峰富士の山を仰ぎ見ることができる豊かで潤いのある静岡県において、実り多い研究大会であったと思います。また、サブテーマ「郷土を愛し　人との関わりを大切にし　夢に羽ばたく子どもの育成」とあるように、「地域貢献」「コミュニケーション」「夢実現に向けた努力」についての重要性を改めて強くもちました。

明日から子どもたちや教職員のために新たな気持ちで業務に邁進したいと思います。

第57回全国公立学校教頭会
静岡大会運営にかかわって

宇都宮市立清原東小学校　高　橋　　司

今回、全国公立学校教頭会研究部員という役割を仰せつかり、果たして自分に務まるのかという不安の中、全国大会を迎えました。

全国教頭会に携わることになり、まず感じたのは、教頭会の組織の大きさです。全国の約3万人の会員で構成され、研究・調査されたことは多くの団体に影響を与えています。全国教頭会→ブロック→県→市町村と裾野を広げ、それぞれに研究大会がありますが、全国大会はそのトップとなる大きな大会です。したがって、分科会も非常に中身の濃い、有意義なものでした。

この大会の企画・運営に当たっては、大会前に数回行われる打ち合わせ・準備のため、それこそ全国の都道府県からメンバーが集い、短い時間で効率的に役割分担等の検討を行います。私は研究部なので、主に分科会の運営を担当しました。運営に当たっては、これまでに先輩方が蓄積してきたノウハウや台本、留意点等が大変わかりやすく整理されており、困ることはありませんでした。会場となった静岡県の教頭会の皆さんはほぼ総出で、受付・接待・案内・会場などなど様々な役割を一丸となって果たし、細やかな気配りと大変スムーズな大会運営が印象的でした。

大会準備のため何回も東京で会合があったり、大きなプレッシャーがあったりしますが、同じような思いや立場の方々との出会いが新鮮で、すぐに打ち解け、楽しく務めさせていただいています。このような貴重な機会を与えていただきましたこと、会員の皆様に感謝いたします。

第６分科会に参加して

宇都宮市立泉が丘中学校　手　塚　宏　行

第６分科会では、「副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題」というテーマで、文科省初等中等教育局企画官の安井順一郎氏の講演と、グループ協議が行われた。

安井氏の講演内容としては、「これからの教育改革と新しい教師像」という題目で、ＰＩＳＡ調査結果や学習指導要領の改訂の進行状況についての説明があった。

この中で日本版カリキュラムデザインとして、「どのように社会・世界とかかわり、よりよい人生を送るか」「何を知っているか、何ができるか」「知っていること・できることをどう使うか」の３点をあげ、「どのように学ぶか」について「アクティブ・ラーニング」とまとめていた。

また、学校業務の適切な分業による「チーム学校」の推進では、事務担当者を増やしたり、専門性の高い職員（例えばＳＳＷなど）を配置したりしていく構想を述べていた。このような構想を実施するにあたり、副校長・教頭のマネジメント強化の大切さを述べていた。

グループ協議では、教頭の調査事務削減のために、重複がないよう市や県に働きかけたり、校内の事務を整理したりすること、ミドルリーダーを育てていくこと、少人数指導の効果を広くアピールすること、専門性の高い外部人材を活用することなどの意見が活発に交わされた。

自立と貢献

宇都宮市立横川中学校　執　行　正　義

本校は、宇都宮の中心部から南東６kmに位置し、砂田街道沿いにある。周囲は田園が広がり、自然に恵まれた環境にある。砂田方面では大型商業施設も多数でき、住宅地も造成されており人口も増加し交通量も増している。

さて、本校では26年度より、基本目標として「自立と貢献」を掲げている。将来社会人として「自立と貢献」ができる人間の育成を目指し、全職員が言葉や態度で生徒に意識付けをしている。

体育祭では、団体種目において学級対抗の「よさこいソーラン」や「全員長縄とび」等、学級に「貢献」しようとの種目を増やし、おおいに盛り上がりを見せた。

また、学校生活への貢献や校内での善行を認め励ます機会として、学年ごとに「貢献賞」を年３回設定している。生徒の自己肯定感を高めるとともに、学校や地域において他の模範となる行動をしている生徒に対して、表彰を行うことにより生徒の実践意欲を一層高めていこうという取組である。

余談ではあるが、「ツバメが安心して子育てできる」学校でもある。昇降口内にツバメが巣作りし、それを生徒も職員も温かく見守っている。フン害も考慮したが、生き物を大切にすること、子育ての過程を生徒に見せたいとの校長の意向から巣の撤去を見合わせた。高速で廊下を飛び回るツバメにもだいぶ慣れた。

地域は宝

大田原市立薄葉小学校　塚　田　修　也

本校は全校生229名の小学校です。新興の住宅エリアが学区の大半を占めており、地域の結束や協力というものは期待しにくい環境ととらえられがちですが実態は全く異なります。春には「のざき桜祭り」、夏には「野崎地区夏祭り」、秋には「野崎地区文化祭」が開催され、地域が一体となって盛り上がります。しかし、本校としての特色ある地域性をよく表している活動となると以下にあげる二つに凝縮されるでしょう。

一つは「夏休み実践活動」。これは、ＰＴＡが主体となって夏休み中に子どもたちに特に取り組ませたいテーマを２～３個設定して、それを夏休みを通して親子で検証していくという取組です。たとえばあいさつや手伝い、勉強などの共通テーマがあり、それをさらに親子で細分化した目標として設定するわけです。夏休み明けには、休み中に実践した記録カードが提出され、集計結果は地区懇談会で発表されます。

二つ目としては前述の「地区懇談会」があげられます。これは、保護者・児童・地域住民・教員が一つのテーマをもとにフリートークをして教育に関する共通の認識を深めていこうとする試みです。例えば昨年度の共通テーマは「人との関わり　～あいさつ　携帯　あそび」でした。みんなが現在関心を寄せているようなテーマを予め用意し話し合うのです。この議論を通して「薄葉っ子」のあるべき姿が浮かび上がります。

地域の教育力の復興が盛んに叫ばれる中、本校はとても大きな宝物を手にしているなと感じます。地域や保護者が一体となって学校を支えてくれるこの学校で、私たち職員も熱い志を持たないわけがありません。

チーム下都賀教頭会

下都賀地区小中学校教頭会長　舘　野　美　晴

本会はＡ地区（小山市）・Ｂ地区（栃木市）・Ｃ地区（壬生町・野木町・下野市）の教頭116名（小学校82校・中学校33校)で組織されており、会員の研修と親睦を図り、教頭の資質の向上を目指しています。

本年度は、全国公立学校教頭会の研究主題である「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」を受け、小学校では「教育課程に関する課題」、中学校では「組織・運営に関する課題」に取り組んで２年目となります。昨年度の研究結果から課題を洗い出し、目標を再設定、教頭としての関わりについて更に研究を深めているところであり、10月26日に行われる研究発表会でその報告をする予定です。

教頭は、各学校に一人しかおらず、管理職として日々職務に追われ、悩みを共有できる人が学校内にはいないのが現状です。互いに持ち寄った学校での悩みやふとした喜びの共有をしながら、課題解決に向けてのディスカッションを深め、この研究を進めています。まさしく支え合い励まし合い、学び合う時間です。管理職として、生徒のために、学校のために私たちがやるべきことを再確認し、明日からの力を養う会になっています。

また、下都賀地区は生きる力（「学ぶ力」「豊かな心」「健やかな体」）を育むことを目指した「本校ならでは」の教育活動に取り組んでいます。本会での研究を地区全体で共有し、本地区ならではの教育の実践を目指し、『チーム下都賀教頭会』として今後も更なる努力をして参りたいと思います。

相互に高め合える教頭会を目指して

塩谷地区小中学校教頭会長　斎　藤　　学

塩谷地区小中学校教頭会は、矢板市・さくら市・塩谷町・高根沢町の２市２町の小学校25名、中学校11名の教頭36名で構成されています。本部役員のほか、研修部と調査・要請部を組織し、各市町より選出された部員を中心に活動しています。地区の事務局は市町が持ち回りで担当しますが、本地区は地域の実情により市町ごとの学校数や各学校の規模は様々で、市町ごとの会員数もまちまちです。特に塩谷町は学校の統合が進み、小学校３校、中学校１校となり、町単独での運営が困難な状況となってきました。昨年、塩谷町とさくら市の教頭会の統合を検討しましたが、様々な事情により、統合は廃案となり、塩谷町教頭会の少数独立が続いています。今年度はその塩谷町が地区の事務局を担っていますが、地区教頭会の運営に支障を来さないように役割を果たしていきたいと思います。

本地区では、毎年10月に地区小中学校教頭研究大会を実施しています。研究主題は、全国統一研究主題や県教頭会において本地区に割り当てられた課題（「子どもの発達に関する課題」）に基づき、平成26～28年度の３年間については、一時減少に向かいながらも、再び増加傾向にある不登校への対応を図ることが喫緊の課題と考え、「すべての児童生徒にとって魅力ある学校をめざして～不登校未然防止に向けた教頭としての取組～」としました。各市町教頭会の研究実践は、研究集録にまとめられます。大会では、各市町の実践した内容について、数名のグループに分かれて協議の場を設定し、更に教頭として果たすべき役割や職務の内容について、理解を深めることに努めています。また、グループ協議は貴重な情報交換の場ともなっています。社会の変化に伴い、児童・生徒はもちろん、保護者や地域住民の状況が激変しつつある中で、学校は未曾有の事例に直面し、難しい判断や対応を迫られています。教頭職としての知恵や情報を共有し、相互に高め合える教頭会をめざして、研鑽を重ねていきたいと考えています。

ひ　ろ　ば

日光和楽踊りと浴衣の関係を学ぶ「浴衣の着付け体験活動」

日光市立清滝小学校　丹　治　良　行

「教頭、清滝小の子ども達に浴衣を着せて日光和楽踊りに参加させたい。」

日光市清滝では、栃木県を代表する伝統民謡「日光和楽踊り」が毎年古河電工日光事業所で開催され、約100年続いている。

本校の地域コーディネーターは、子ども達に「地元（故郷）を愛する心」を育てたいという切なる思いをもっている。その思いから発せられた言葉が冒頭の言葉である。

日光和楽踊りには、①服装は浴衣で統一する②歌詞は美しい言葉を使う③夜12時までに終了する等の５つの決まりがある。地域コーディネーターと私は、単なる浴衣の着付け体験に終始することがないよう、当日は日光和楽踊りと浴衣との関係を十分踏まえた「浴衣の着付け体験活動」とすることを事前に確認した。

終了後の子どもの達の日記には「今日は日本の文化が楽しめた」「日光和楽踊りには浴衣を着て参加したい」「レッドカーペットを歩いたことは人生初めてだったので嬉しかった」等の感想があり、充実した体験活動を行うことができたのではないかと思っている。

地域の力はとても大きい。学校だけでは行うことができない活動（準備も含む）を行うことができる。今後も本校の教育活動が充実するようコーディネーターやボランティア等、地域の力にたくさん頼りたいと思う。

ＳＴＡＲ～一人一人が輝く田野中

益子町立田野中学校　高　浜　真里子

タイトルは、今年度の本校生徒会のスローガンである。「Smile, Team, Area, Respect」の頭文字をとったもので、笑顔に溢れ、仲間と地域を大切にし、互いを尊敬し合う学校を目指すというものだ。このスローガンを考えたのはもちろん、生徒たちである。

本校では「生徒主体の活動」を学校経営の重点として掲げ、昨年度は運動会や立志式を生徒による運営へと変えた。今年度はさらに宿泊学習や修学旅行でも、できるだけ生徒中心に活動を進め、教師はサポートに徹するようにした。その結果、生徒は少しずつ自信をつけ、自分たちで企画し、活動することに楽しさを感じ始めている。

本校勤務４年目になるが、４年前の田野中学校には活気がなかった。学校評価では、生徒の満足度が低く、保護者からの批判も多かった。この状況を変えようと取り組んだのが、生徒主体の活動を増やし、生徒たちに達成感や満足感を味わわせることだった。

生徒たちが生き生きと活動するようになると、保護者からの批判は聞かれなくなった。それどころか、感謝の声が届くようになった。その陰には、手間と時間を惜しまず、生徒と向き合う教師の姿がある。本校は今年も、このスローガンの下、教師と生徒が一丸となって頑張っている。

日本で最も美しい村

那珂川町立馬頭西小学校　小　森　　厚

今年の入学式や授業参観で、保護者の方から「覚えていますか」と声をかけられることが多々ありました。と言うのは、約30年前の初任の頃、この学区の中学校での教え子の皆さんでした。担任した生徒、教科や部活を担当した生徒など懐かしく思い出すのと同時に、教え子のみなさんのお子さんを二代にわたって教えることになるのだと身の引き締まる思いでした。

私がこの４月から赴任した馬頭西小学校は、里山の原風景の中に、歴史ある陶芸の里が融合した日本で最も美しい村にあります。校舎は、木造平屋で６教室と職員室、図書室があり、別棟に理科室と音楽室があります。昭和の香りの残る、里山の小さな小学校で、とても趣があります。児童数は40名で、２・３年生と４・５年生がそれぞれ複式学級となり、全部で４学級です。

児童は１年生から６年生までとても仲が良く、縦割り班の活動を協力して行っています。田植えや野菜づくりも地域の方々に教えていただきながら全校生で行っています。保護者や地域の方々が協力的で、まさに地域の宝の子どもたちを地域で育てているといった感じです。中学校勤務が長かった私にとっては、小学校の行事の多さに驚きました。子どもたちは体験の中で成長しているのだなと感じているところです。地域の方々に協力いただきながら教育活動の充実に努めていきたいと思います。

編集後記

ことのほか暑い夏が過ぎ去り、夜の涼しさと虫の声が身に染みる季節となりました。会員の皆様には、いかがお過ごしでしょうか。

さて、今回の会報では、定期総会や関ブロ提言者研修会の様子、静岡県で開催された全国大会等について掲載させていただきました。

学校教育を取り巻く環境が日々刻々と変化する今日この頃ですが、当会報が少しでも会員の皆様の参考になれば幸いです。

末文ですが、御多忙中にもかかわらず原稿を御執筆くださいました方々に深く感謝申し上げます。　（神野）